

## 夏秋トマトのナス台木を利用した晩期セル苗直接定植作型

【要約】夏秋トマト晩期作型のセル苗直接定植（5月下旬～6月）は、通常の育苗に比べ省力であるが、初期の過繁茂が課題となっている。この作型に「ナス台木トマト」を用いると、トマト台木に比べて過繁茂の抑制が可能となり、青枯病の発生も抑制される。

中山間農業研究所・中津川支所

【連絡先】0573-72-2711

### 【背景・ねらい】

夏秋トマトにおいて気温の低下する9月以降は、出荷量が大きく減少することから、販売価格が上昇するうえ、労働力にも余剰が発生する。このため、8月中旬以降に収穫が開始される晩期作型は経営的メリットがあるため有効な作型であるが、通常のポット苗定植では、育苗と定植作業が通常作の繁忙期にあたり、労力的に導入が難しい。このため、セル苗直接定植が有効であるが、晩期作型のセル苗直接定植では、高温・長日条件下のため生育初期の過繁茂が問題となる。そこで、ナス台木を用いて、セル苗直接定植における生育及び青枯病発生抑制効果について検討する。

### 【成果の内容・特徴】

- 1 ナス台木を用いることで、5月下旬から6月の晩期セル苗直接定植でも過繁茂にならず（図2）、比較的容易に栽培ができる。
- 2 青枯病の発生を抑制し、青枯病汚染圃場での栽培が可能となる（図1）。
- 3 慣行栽培に比べて果実が小玉となるが、A品率は向上する（表1、図2）。
- 4 慣行の育苗を行った作型に比べて、可販収量は約2割減収する（表1）。

### 【成果の活用・留意点】

- 1 本作型は高い収量性を求めることができないので、労力分散が可能な補助作型として経営の中に導入する。
- 2 トマト台木に比べてナス台木は強い青枯病抵抗性を示すため、青枯病発生圃場の有効活用が可能である。
- 3 尻腐果の発生が多い傾向にあるので（表1）、多めのかん水を行う。
- 4 穂木からの不定根の発生があるので（図3）、ナス台木部の長さを一定以上確保する。

【具体的データ】

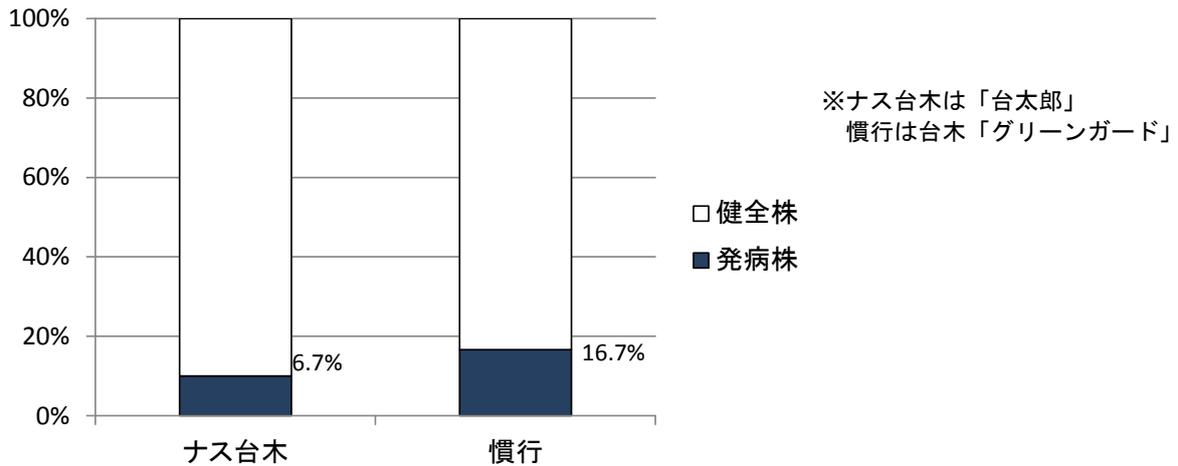


図1 青枯病発病率（平成28年）

表1 収量性

試験区	収穫果数 (果/株)	平均果重 (g/果)	可販収量 (kg/10a)	A品率 (%)	格別率 (%)	空洞果 (果/株)	尻腐果数 (果/株)	裂果数 (果/株)	出荷不可裂果 (果/株)
(H25年桃太郎8)									
ナス台木	20.5	156	9,213	38	19	4.9	1.1	3.1	0.4
慣行	20.5	186	10,958	20	15	8.0	0.0	4.8	1.8
(H25年麗夏)									
ナス台木	23.9	158	10,221	43	23	2.5	3.9	1.6	0.3
慣行	20.5	222	11,673	19	21	5.8	0.8	4.1	0.9
(H28年桃太郎8)									
ナス台木	21.3	142	8,059	31	26	5.2	1.8	3.8	1.1
慣行	19.3	195	10,391	28	18	4.3	0.3	4.3	1.6

※慣行区は台木グリーンガードを用い開花期まで育苗をおこなった。



図2 ナス台木トマトの草姿（平成25年）

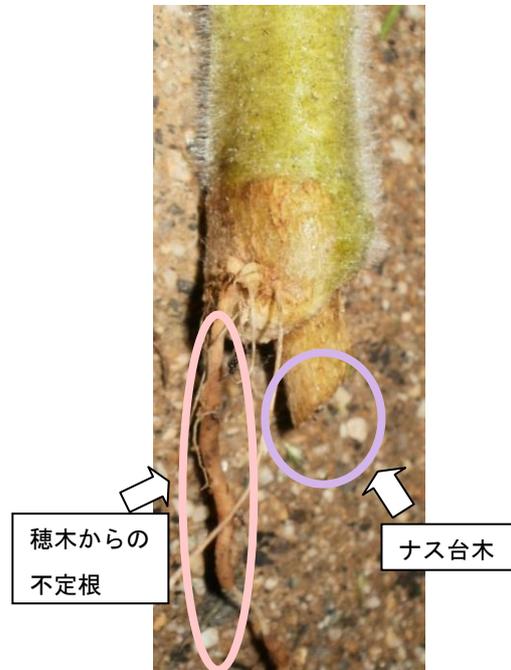


図3 穂木からの不定根（平成25年）

研究課題名：革新的接ぎ木法によるナス科野菜の複合土壌病害総合防除技術の開発  
(平成25～27年度)

研究担当者：熊崎晃